

高岡市立博物館開館50周年記念
特別展「高岡のお宝展」 出品目録
 〔会期：2020年8月1日(土)～10月11日(日)〕

国指定史跡「高岡城跡」（高岡古城公園）内に立地する当館（現企画展示場）は、昭和44年（1969）の高岡市制80周年・開町360年記念事業の一環として建設が決定し、同年10月着工、翌45年（1970）6月1日に開館しました。令和2年（2020）は50周年にあたります。現常設展示場は、昭和26年（1951）の高岡産業博覧会の折に建設された美術館パビリオンで、博覧会終了後に高岡市美術館として開館しました（美術館は平成6年に中川1丁目へ移転。同10年より当館常設展示場）。

当館では、日ごろから高岡に関わる歴史・民俗・伝統産業等に関わるさまざまな資料を収集し、適切に保存・管理、調査・整理、展示・公開しています。本展では、当館がこれまで収蔵してきた資料より厳選した「お宝」を展示・紹介します。

最後に、本展開催にあたり貴重な資料を快くご寄贈賜りました、関係各位に厚く感謝申し上げます。

1 歴史資料						
①古文書にみる高岡						
No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
1	神保氏張知行安堵状 (海老坂藤兵衛宛)	天正7年 (1579) 11月16日	1	23.8×39.7	越中守護代庶流で守山城（現高岡市）主・神保氏張（1528～92）が、現高岡市東海老坂の海老坂藤兵衛（上坂氏）へ後雲寺領14俵1斗6升の知行を安堵したもの。後雲寺領は不明。上坂家文書のうち	当館
2	前田利光書状（宛所不明／後欠）	〔慶長15～19年 (1610～14)カ〕 4月4日	1	19.5×89.5	加賀前田家3代当主・前田利常が「利光」と名乗っていた時期（1601～29年）及び、2代利長（利常義兄）が病床にあり、死去するまで（1610～14年）の書状。利長の高岡城への見舞いの途中に贈られた石花（テングサ）一折への礼状。上坂家文書	当館
3	前田利長書状（中少他一名宛）	〔慶長14～16年 (1609～12)カ〕 5月30日	1	34.5×50.0	高岡城下町造成中（1609年以降）の利長が側近の駒井守勝等へ、砺波郡西部金屋（現高岡市戸出西部金屋）の鋳物師に高岡へ来るようになどと指示している文書。また山田与兵衛等武士と職人の屋敷割が同時に行われていたこともわかる。「中少」こと駒井中務少輔守勝（2,000石）などへ命じている。高岡金屋町の鋳物産業の発祥を示す貴重な史料。高岡市指定文化財	当館
4	前田利長書状（長兵へ宛）	年未詳6月17日	1	33.1×51.3	前田利長から利長の奏者（取次役）の奥村長兵衛（700石）宛の中田布替皆済令状。「中田」と冒頭にあり、高岡市南東部の町（宿）のことかと思われる。年代は未詳だが、利長の晩年、特に高岡在城期（1609～14年）と思われる。遅くとも、その時期の中田では布や米などが換金できる「市」があったことがわかる。八講布・五郎丸布などとよばれた麻布は、中田を含む砺波郡の特産品だった。高岡市指定文化財	当館
5	戸出野開御印状	元和3年 (1617) 11月1日	1	19.8×111.9	加賀藩重臣の横山長知と本多政重が3代利常の意を受け、中条村（現砺波市下中条）十村・川合又右衛門に宛てた書状。新村立て、戸出野開墾、市立てを許可した御印状（利常の「満」印）。高岡市戸出地区の発祥を示す貴重な史料。高岡市指定文化財	当館

6	越中砺波郡上開発村御印	寛文10年 (1670)9月7日	1	37.6×58.0	「村御印」は、江戸前期に前田家領（現富山・石川両県）各村に配布された年貢割付状。砺波郡上開発村（現高岡市上開発）の草高（標準収穫量）は451石。免（税率）は「四ツ二歩」（42%）、小物成（雑税）は野役の銀4匁のみである	当館
7	鋳物師職許状（藤田十右衛門宛）	弘化4年 (1847)10月	1	33.3×50.4	全国の鋳物師を統括した京都の下級公家・真継家13代則能から、高岡金屋町鋳物師・藤田十右衛門宛の営業許可証。鋳物師は真継家に対して代替わりごとに許可を受ける必要があり、その際に前の許状が没収され、礼金と引き替えに改めて発給された	当館 (藤田佐一氏)
8	射水郡一町五厘略絵図（写）	江戸後期	1	52.0×54.0	高岡市域を含む越中射水郡の詳細な絵図。縮尺1/72000。和算家・測量家で現射水市高木の石黒信由（1760～1836）の描いた「射水郡一町一分分間絵図」の系譜を引く信由の孫・北本半兵衛の「射水郡一町五厘分間絵図」の写しとみられる。十村組が10組で、全村数327ヶ村が記載されている	当館
9	小矢部川筋七十六ヶ村絵図（写）	原図：元禄13年 (1700)9月5日 (江戸後期写)	1	57.0×74.0	砺波郡内島村（現高岡市内島・荒屋敷など）の十村・孫六が担当する十村組79ヶ村を描いた絵図。本図には、小矢部川などの大小河川の川筋、戸出往来などの街道、用水や橋の長さ、幅などが詳細に記されている。戸出十村・川合家伝来史料	当館
10	北海道産物会所用達申付状（藤井・車屋・鶴屋宛）	明治3年(1871)8月	1	18.0×69.5	開拓使（新潟出張所）北海道産物会所が、いわゆる「御用達」商に命じたもの。宛先は伏木湊の藤井（能登屋）三右衛門（能三）、車屋（八坂）金兵衛、鶴屋（堀田）善右衛門の3名。この3家が当時の伏木を代表する廻船問屋であり、これまで多くの北海道の産物を商っていたことがうかがえる。堀田家文書	当館 (堀田一善氏)
11	売仕切（昆布）	明治10年 (1877)10月9日	1	30.6×29.1	函館の井村利平が、堀田家持船の徳衆丸の船頭・儀助に、釧路昆布504駄（約13t）を409円14銭7厘で売却した証文。堀田家文書	当館 (堀田一善氏)
12	仕切記（繰綿）	明治6年(1873)6月付	1	31.5×43.7	大坂の三島又三郎が、伏木の3代八坂金兵衛（金平）に、繰綿（種を取っただけの未精製の綿）2種計42本を357円で売却した証文。末尾の「御支配 泉弥平」は大坂堺の商人で、保証人として名を連ねている。八坂家（車屋）文書	当館 (今井昭次氏)
13	「船主祈願書」	明治9～15年 (1876～82)	1	24.0×18.0	高岡市西田の摩頂山国泰寺（現臨済宗国泰寺派本山）の勸進（航海安全・商売繁盛祈願）に応じた伏木や高岡等の北前船主たちの連名簿。正和勝之助著『越中伏木湊と海商百家』（桂書房、1995年）p300に掲載の表によると、明治9・11～15年の6期にわたり、船名46艘と船主名が列記されており、情報の少ないこの時代の貴重な史料である。八坂家（車屋）文書	当館 (今井昭次氏)

14	国泰寺禅堂建築に付 勸進状	明治25年 (1892)12月11日	1	26.3×87.8	臨済宗国泰寺派本山の摩頂山国泰寺（高岡市西田）の禅堂建築に際して寄付を呼び掛けた文書。原題は「禅堂建築募縁序」。国泰寺が翌26年に光明天皇500年の法会を行うので全国から僧侶が来る。よって筆者の富山県第4代知事・徳久恒範（1843～1910）と親交のある国泰寺55世管長・雪門玄松（1850～1915）が禅堂を建てたいと言っているの、ぜひ浄財を寄付してほしいとしている	当館
15	絵葉書「越中氷見郡 （西田）臨済宗大本 山国泰寺山門ノ景」	〔発行〕大正7 ～昭和7年(1918 ～32)頃	1	9.1×14.1	高岡市太田の西田地区にある国泰寺の山門を写した絵葉書。現在の山門は明治22～26年(1889～93)頃の建築で、写真当時の屋根は茅葺きであったことがわかる（その後本瓦葺きとなり、現在は桧瓦葺き）。山門の仁王像は、高岡の仏師・本保義平作。東京丸の内・(株)青雲堂発行	当館
②高岡の測量関係資料と絵図、出版物						
No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
16	渾天儀（漆工・中邨 尚潤／木彫・黒川成 清）	江戸後期	1	幅54.6×高 61.4	太陽や月などの天体の位置を推定する観測用、またはその動きを説明する模型として使われた器具。高岡の木彫・漆工職人による制作。木彫の龍の支柱が支える水平の赤い環を地平線に見立て、それに天の子午線を示す黒い環が垂直に交わる。黄土色の環は地球からみた太陽の軌道・黄道を、内側の白色の環は月の軌道・白道を示す。富山県内に2点のみ現存。戸出・川合家旧蔵。高岡市指定文化財	当館 (奈部喜雄氏)
17	軸心磁石盤と強盜式 磁石台	江戸後期	2	〔磁石盤〕 32.4×37.0 ×高5.0 〔磁石台〕 幅41.5×奥 行34.7×高 68.0	測量器具。現高岡市戸出放寺の清都家伝来資料（98点のうち）。清都家が入門した和算家・測量家で、共に現射水市高木の石黒信由（1760～1836）考案品。強盜式とは、傾斜のある地形でも水平になる仕組みのこと。富山県指定文化財	当館 (清都小彦太氏)
18	勾配板	江戸後期	1	32.3×36.2 ×厚1.9	測量器具。道の傾斜や勾配を測る器具。本来は磁石盤に取り付けて使用される。坂の上に立てた標識をのぞき、垂らしたおもりの糸の目盛りから勾配を読み取る。清都家資料。富山県指定文化財	当館 (清都小彦太氏)
19	割円度（1点）、比 例表（1点）・游表 （蘭尺／2点）	江戸後期	4	①径31.3× 厚0.6 ②18.3× 4.5×厚0.6 ③20.3× 12.0×厚 0.4 ④11.9× 8.9×厚0.6	絵図作成道具。①割円度は分度器（墨書「天保八年(1837)六月製／中村義方」）。中村(1824～93)は現兵庫県豊岡市市出石出身の和算家。②比例表・③④游表は割円度の副尺で、目盛りを10分の1度まで読み取り可能な「バーニア目盛」（游表2点ともに墨書「清都露翠」・「川合用」）。清都家資料。富山県指定文化財	当館 (清都小彦太氏)

20	地割紙	天保11年(1840)	1	34.9×31.0	絵図作成用具。分度器として使用（墨書「天保十一庚子年五月」・「三百六十度地割」）。紙製。清都家資料。富山県指定文化財	当館 (清都小彦太氏)
21	渾発	江戸後期	2	〔大〕 長 19.5×幅 3.2 〔小〕 長 18.7×幅 0.5	絵図作成用具。円を描くほか、定規から長さを読み取る「ディバイダー」として、先をへらや錐として使うなど用途は多い。清都家資料。富山県指定文化財	当館 (清都小彦太氏)
22	清都彦四郎著『御検 地方諸格』	嘉永2年(1849)	1	24.5×18.0 ×厚1.2	清都家19代・彦四郎（露翠）著。検地に関わる様々な取り決めや心構えなどが列記され、検地関係の書類様式が手写しで収録されたもの（写本）。清都家資料。富山県指定文化財	当館 (清都小彦太氏)
23	五十嵐篤好著『地方 新器測量法』（上・ 下巻）	安政4年(1857) 刊	2	〔上〕 25.7 ×18.3×厚 1.0 〔下〕 25.6 ×18.3×厚 0.9	上巻は羅針盤を用いず、便利な新器を発明して測量する方法が説かれ、下巻は三角関数表（六位十分八線表）が掲載。版本。五十嵐篤好(1793～1861)は石黒信由の門人で、現高岡市東五位地内の十村。和算・測量・土木・農政・国学等に秀でた。清都家資料。富山県指定文化財	当館 (清都小彦太氏)
24	尾崎康工編『俳諧 百一集』	明和2年(1765) 刊	1	27.3×19.0	越中砺波郡戸出村（現高岡市戸出）出身で越中を代表する俳人の一人・尾崎康工(1701～79)が編纂した俳書。康工が松尾芭蕉以下全国の俳人百人の秀句を選び、自ら描いた肖像も掲載。大変好評を博し、版が重ねられ、嘉永3年(1850)には普及版が出版されるなど大ベストセラーとなった	当館 (尾崎安治氏)
25	筏井満好著『自然 登水車』	文化5年(1808)	1	23.7×17.0	現高岡市上伏間江出身の和算家・筏井四郎右衛門満好(?～1835)の著。低い所の水を自然に高い所へ登らせる「永久機関」としての揚水車の研究を行う。しかし摩擦を考慮しておらず実現不可能ではあったが、日本科学史上にも特筆される史料である。満好は石黒信由に学び、信由と共に広く加賀藩内の測量・製図を行った	当館 (正橋剛二氏)
26	越中国射水郡高岡袋 町地引絵図	明治8年 (1875)11月	1	38.6×93.8	高岡開町当初にできた本町（地代無料）35町の一つ。地租改正のために作成された地籍図。屋敷や道、溝などが色分けされている。町名は当初、町の形が細長く、入口が一箇所しかない袋小路のようであったことに由来する。平成27年4月、平米町と共に旧町名が復活した	当館
27	富山県射水郡伏木町 大字古国府町地引絵 図	明治43年(1910)	1	190.0× 87.6	明治33年(1900)に開業した中越鉄道「伏木駅」から勝興寺（右上の水堀で囲まれた区域）への参道がピンク色に塗られている。この道は、勝興寺が駅開業に先立つ同31年に独自で通したものの。また川は「射水川」とある。これは大正元年(1912)以前、庄川が小矢部川に合流していた能町辺りより下流の川のこと	当館 (高野光子氏)

28	道路新設に付見取図 (控)	明治40年(1907)	1	24.1×71.5	明治40年(1907)に出された勝興寺の参道を新設するために作成された見取図。本図上部は現勝興寺の場所にあたり、そこから新設予定の参道を通り「高岡ヨリ伏木ニ至ル道路」(現伏木駅前)の道へと続いている	当館 (高野光子氏)
29	高岡古城公園「朝陽の滝」設計図	昭和6年(1931)	1	92.6×57.3	昭和6年(1931)に高岡市上水道通水記念として竣工した朝陽の滝(古城公園本丸北東部)の設計図。庭師・島田駒次郎が滝工事を手がけた。地盤傾斜度(黒線)、海底線(青線)、両側石積傾斜度(赤線)が書き込まれる。同6年から7年に工事の延期願に対する許可書が付属。この滝は一時期断水状態だったが、同52年(1977)に復元された	当館 (島田清心氏)
30	高岡市上水道通水式 記念絵葉書	昭和6年(1931)	4	各9.1× 14.3	昭和6年6月22日に高岡市上水道通水式が行われた際に発行された記念絵葉書。 本市では、昭和3年(1928)4月より、全国に先駆けて上水道敷設工事が開始され、同6年6月3日に完成した。これを記念して、古城公園本丸横に“古の遊び子”の置物を配した噴水池(戦後取り壊され現在はない)と滝(現・朝陽の滝)を作った。清水町にある旧配水塔は、昭和33年3月まで使われた	当館
③移り行く高岡の風景						
No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
31	絵葉書「伏木港・ 藤井能三翁銅像」 (複写)	大正11年(1922)	1	[現資料] 8.8×13.7	賑わう伏木港と、築港や教育など伏木の近代化に尽くした実業家・藤井能三(1846～1913)の銅像写真が写ったもの。銅像は、能三が創った伏木町立伏木尋常高等小学校(現高岡市立伏木小学校)創立50周年記念(大正11年3月)に建設されたもの(昭和18年戦時供出、同27年再建)	当館
32	『藤井能三翁銅像建 設記念帖』	大正11年(1922)	1	22.3×15.3	大正11年に伏木町立伏木尋常高等小学校(現高岡市立伏木小学校)校庭に建設された藤井能三銅像建設記念出版。本銅像は、昭和18年(1943)に供出され、同27年の同校80周年記念に、高岡市横田町出身の原型師・米治一(1896～1985)の原型により再建された。台座は南砺市出身の建築家・吉田鉄郎(1894～1956)	当館 (八坂蜜子氏)
33	高岡市鳥瞰図リーフ レット	昭和11年(1936)	1	17.8×78.9	京都出身の画家・吉田初三郎(1884～1955)が描いた高岡市鳥瞰図(原画は昭和7年・当館蔵)。本リーフレットには、本市の概要や観光名所、富山県内の名所なども掲載されている	当館
34	写真「出征列車歓送 の女学生」(複写)	昭和16年(1941) 頃	1	[現資料] 8.2×12.0	高岡駅構内であろうか、日の丸の小旗を持った女学生たちが、兵士が乗った出征列車を見送る風景。当時は各地でこのような見送りの風景がみられた	当館 (小倉長作氏)

35	写真 大日本国防婦人会「成美婦人会」(複写)	昭和戦中	1	[現資料] 13.5×19.9	昭和7年(1932)に設立した、高岡市成美地区の女性軍事援護団体・大日本国防婦人会「成美婦人会」の記念写真。戦時中、多くの女性が会員として活動し、出征将兵の歓送迎をはじめ遺族の慰問、防空訓練など、戦時体制の協力に努めた	当館 (野尻嘉昭氏)
36	海軍報国号献納飛行機関係資料	昭和19年(1944)	4	①8.6×13.6 ②23.8×35.6 ③25.5×18.0 ④25.7×19.0	①報国号飛行機命名式記念写真、②「飛行機献納申出書」、③報国号飛行機命名式に関する依頼書、④「献納飛行機命名式諸費割当金受領証」。戦時中、民間(団体や個人)から集めたお金を軍に供出し、献納された軍用機を「献納機」という。海軍は報国号と呼ばれ(陸軍は愛国号)、献納者にちなむ名が付けられた。高岡市横田の日本晴酒造・荒野権四郎氏が献納したので「荒野日本晴号」とある	当館 (荒野吉治氏)
37	日の丸寄せ書き	昭和13～20年(1938～45)頃	1	66.5×96.0	死を覚悟して出征する兵士に、友人・親戚・職場・隣近所の人たちなどが寄せ書きして贈ったもので、兵士が携行した。高岡市職員の出征であり、助役・収入役以下市職員の署名が並ぶ	当館
38	千人針	昭和戦中	1	16.0×185.7	弾除けのお守り布。千人の女性に一針ずつ縫い玉を付けてもらった。また、語呂合わせで5銭〔死(四)線を越える〕・10銭〔苦(九)線を越える〕玉を縫い込んだものもある。特例として寅年生まれの女性は自分の年齢だけ結び目を作ることができた。これは虎が「千里を行き、千里を帰る」との言い伝えにあやかっただけである	当館 (中澤亨氏)
39	高岡市内戦中戦後配給切符・購入通帳	昭和戦中・戦後	5	[米] 19.0×34.2 [醤油] 18.1×20.9 [塩] 18.6×17.5 [味噌] 18.1×21.0 [衣料] 18.1×8.3	生活の簡素化が叫ばれる中で、消費者への配給制は昭和15年(1940)に六大都市を中心に、まずマッチと砂糖から始まり、次いで同16年に米、翌17年には味噌・醤油・塩についても実施された。衣料切符は、昭和17年2月から点数制による配給統制が開始された。購入通帳や切符は戦後の混乱期にも発行された	当館 (小川修氏)
40	高岡産業博覧会会場案内図	昭和26年(1951)	1	26.4×37.6	昭和26年(1951)4月5日～5月25日に高岡古城公園全域で開催された博覧会の会場案内図。戦後復興を目的に全国で開催された。産業博覧会では、日本の豊富な電源力と産業が紹介された。また、地方産業の振興を図ることを目的とし、特に富山県の電力が豊富で安価なことを強くアピールした。博物館の常設展示場は、この年、美術館パビリオンとして建てられた建物である	当館 (林泣童氏)
41	『高岡産業博覧会案内』	昭和26年(1951)	1	18.0×13.0	昭和26年4月5日から5月25日にかけて、高岡古城公園を会場として行われた高岡産業博覧会の案内書。発行・高岡産業博覧会事務局	当館

42	「観光のしるべ」	昭和26年(1951)	1	36.8×52.2	発行・高岡市役所。昭和26年(1951)高岡産業博覧会開催時に、発行された高岡市近郊の刊行パンフレット。鳥瞰図風の市内地図が描かれ、市内外の観光名所、温泉地などを写真付きで紹介している。古城公園には、博覧会会場のイラストが描かれている	当館
43	高岡産業博覧会記念小壺	昭和26年(1951)	1	幅7.5×奥行6.5×高6.5	高岡産業博覧会開催記念に製作された小壺。前面には博覧会のテーマ塔のイラストが描かれ、バラを象った装飾が付けられる。裏面には「高岡産業博覧会」及び博覧会のマークをデザインした「TF (Takaoka Fairの頭文字)」が記される	当館
44	高岡産業博覧会記念タバコ「光」	昭和26年(1951)	5	各7.0×4.2×厚1.7	高岡産業博覧会開催記念に作られたタバコ(ケースのみ)。表には小馬出町の御車山のイラストが描かれ、表には「高岡産業博覧会記念」、「光」と記されている。タバコ「光」は昭和11年発売の人気ブランド	当館
45	ポスター「北陸三県合同原子力平和利用大博覧会」	昭和32年(1957)	1	64.5×52.6	高岡古城公園を会場として、同年6月15日～8月18日に開催された博覧会。この博覧会は全国11箇所(東京・名古屋・京都・大阪・広島・福岡・札幌・仙台・水戸・岡山・高岡)を巡る巡回展で、原子力平和利用の現状を示す数多くの資料が展示された。高岡では、65日間の会期中で約26万人の入場者があり、原子力時代の始まりを告げる画期的な博覧会として好評を博した	当館
46	『原子力平和利用の果』	昭和30年(1955)	1	29.6×21.0	編集・アメリカ広報庁。昭和30年から同32年にかけて行われた原子力平和利用大博覧会の冊子。全国11箇所を回る巡回展で、最終地である高岡では古城公園を会場に行われた。本博覧会では、流線型の原子力商船や、原子力発電機のほか、近未来の大パノラマなどが紹介された。	当館 (菱澄雄氏)
47	能坂利雄画・編「今庄家秘筐 桜霜巻」	昭和33年(1958)	1	26.8×342.7	かつての高岡名物「桜あんころ」を製造・販売していた今庄作次郎(1890～1981)について記された巻子で、計7点の資料からなる。序文では作次郎の半生がまとめられ、それを証する5点の資料と能坂利雄(1922～91)画の店の外観の絵画がある。能坂利雄は富山県氷見市出身の作家・郷土史家	当館 (古谷昭史氏)
48	絵葉書「高岡公園(其四)御竹藪四阿屋」(複写)	明治40～大正5年(1907～16)	1	[現資料] 9.1×14.1	高岡古城公園小竹藪に建つ四阿屋(休憩所)を写したもの。周囲には樹木が立ち並ぶ。写真中央遠景には二上山と思われる山の連なりが一部みられる。発行・高岡学海堂	当館
49	絵葉書「(高岡名勝)高岡市々街ノ景」(複写)	明治40～大正7年(1907～18)	1	[現資料] 9.1×14.2	高岡市御馬出町(写真手前)から守山町方向(山町筋。写真奥)を写した写真絵葉書。右手前の建物は高岡郵便局内の電話交換棟	当館

50	絵葉書「高岡公園前 田利長公遺徳碑」 (複写)	大正7～昭和7年 (1918～32)	1	[現資料] 9.0×14.1	大正6年(1917)5月に古城公園本丸に建立 された前田利長遺徳碑。発行・(高岡) 棚田書房	当館
2 民俗資料						
①人々の娯楽と賑わい						
No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
51	富札(高岡町仕法 講)	戊辰(1868 年カ)2月15日	1	18.8×10.1	富札とは富くじ、即ち今でいう宝くじの こと。高岡町仕法方役所が興行主となっ て行われた富札。抽選箱から錐を入れて 当選札を突き刺して取り出すことから、 別名「富突き」ともいわれる。裏面には この富札の概要、くじの枚数、当選金額 などが刷られている	当館
52	富札(中田駅仕法 講)	戊辰5月25日	1	19.1×9.8	中田駅仕法講会所が発行した富札。『中 田町誌』によると慶応2年(1866)に中田 駅仕法講の富くじが行われたとあり、 「戊辰」は慶応4年の可能性もある。裏面 の記載から、松・梅組のくじの発行枚数 7,600枚であったこと、そのうち当札100 枚、印達(組違い)100枚、両袖孫(前 後)が800枚の計1,000枚が当たりくじに 該当したことが読み取れる	当館
53	見立番付「加越能古 人高名一覧」	明治27年 (1894)10月	1	51.5×36.2	加越能(加賀・越中・能登)の著名人を 連ねた番付表。美術・学術・文芸等の各 分野で活躍した人物が挙げられる。高岡 関係では、宇津(多)国宗・古入道国光 (宇多派の刀工)、漆工の砺波屋藤蔵(桃 造)、高岡(石井)勇助、板屋小右衛門、彫 金の安川錦(乾)清・安川三右衛門、侠客 大長(蓮花寺屋伝右衛門)などがみられる	当館
54	「新案 高岡商店双 六」	大正期	1	54.5×79.0	高岡の商店の宣伝を兼ねた双六。小馬出 町の梅田呉服店を振り出し、横田町の酒 屋・三谷長八郎を上がりとして、計21の 商店についてイラスト入りで紹介されて いる	当館
55	世界館映画チラシ	昭和3年(1928)	1	27.3×42.8	世界館の映画チラシ。『血涙』、『夏の 日の恋』などの映画タイトルが見られ る。世界館は、明治末期の芝居小屋「関 野座」を改築し、大正3年(1914)元旦に開 館した「八千代館」の後身で、高岡初の 映画館である。同年「八千代電気館」、 同6年「世界館」と改称した	当館 (西田弘氏)
56	世界館 優待割引券	昭和5年(1930)	1	9.0×8.4	高岡市堀上町にあった世界館の映画優待 割引券(2回分)。『霧の中の曙』、『剣 道見世物師』などの映画タイトルがみら れる	当館 (西田弘氏)
57	世界館 映画ポス ター	昭和11年(1936)	1	52.5×39.0	高岡市堀上町にあった世界館の映画ポス ター。『男性対女性』、『あきれた連 中』などのタイトルがみられる	当館

58	高岡文化ニュース映画劇場ポスター	昭和16年 (1941)6月	1	54.0×38.5	駅前の高岡劇場の奥にあった本劇場は、「文劇」、「文化劇場」などとよばれ、昭和15年(1940)12月、高岡新聞社跡地に開業した。翌16年6月の第1週から第5週までのニュース映画、短篇文化映画のタイトルが並び、繰り返し連続上映して観客を入れ替え、安い料金で見せることができた。	当館
59	為中為男作 郷土玩具「高岡の獅子頭」	昭和48年(1973)	2	〔赤〕幅 35.0×奥行 21.0×高 26.0 〔黒〕幅 32.0×奥行 19.0×高 24.0	一本角の獅子頭で、桐・朴の木材を彫って作り、頭は馬の毛を用いる。富山の獅子頭の影響で創始されたという。為中為男は、高岡市蓮花寺出身。この周辺に多くいた仏師の余技から始まった。高岡産の郷土玩具は、この「高岡の獅子頭」と「獅子頭笛」の2種類のみである	当館
60	引札「高岡市下川原町・田開作次郎」(複写)	大正元年(1912)	1	〔現資料〕 51.5×37.0	高岡市下川原町で豆腐・青草(藍摺り布)類を販売した田開作次郎の商店引札(占い付)。引札は、商店などの宣伝用広告物で、江戸後期から昭和前期頃に用いられた。明治期以降は、特に「正月用引札」が流行し、略暦(カレンダー)を組み込んだものや双六仕立てのものもあった	当館 (室崎信一氏)
61	引札「呉服商 高岡市小馬出町 梅田支店」(複写)		1	〔現資料〕 33.4×50.0	高岡市小馬出町の呉服商・梅田商店の商店引札	当館 (室崎信一氏)
62	引札「貨物問屋 高岡停車場前 北秀組」(複写)		1	〔現資料〕 37.4×51.6	高岡停車場(現高岡駅)前にあった貨物問屋・北秀組の商店引札	当館 (室崎信一氏)

②病と医療

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
63	坪井信良訳『新薬百品考』(初・後編)	慶応2年(1866)	4	〔初・上〕 22.9×15.2 ×厚0.9 〔初・下〕 22.8×15.2 ×厚1.0 〔後・上〕 22.8×15.2 ×厚1.0 〔後・下〕 22.7×15.2 ×厚0.8	ドイツ医師・アセンブレナー原著。高岡医者・佐渡家出身の蘭方医・坪井信良(1823～1904)が薬品の製法、効能、用法について訳したもの。信良の訳書は他に『カンスタット内科書』48巻、『グロス外科書』22巻など多数ある	当館
64	佐渡三良著『和蘭薬性歌』(上下巻)	慶応2年(1866)	2	〔上・下〕 22.8×15.1 ×厚0.7	高岡利屋町の蘭方医(産婦人科)・佐渡三良(9代養順/1820～79)著。校閲は弟で幕府奥医師の坪井信良。いろは順に薬名を日蘭語で対照させ薬効を記している。三良は漢詩にも優れた佐渡家は高岡開町時(1609年)に前田利長に招かれた高岡最古の医者	当館

65	坪井信良編 『医事雑誌』 (第2～7, 9, 13～15, 17, 34号)	明治6年12月～同8年12月 (1873～75)	12	各22.1×15.2×厚0.5	本誌は、明治6年(1873)12月に高岡医者・佐渡家出身の蘭方医・坪井信良(1823～1904)が編集した日本で2番目の医学雑誌(同誌の第1号は同年11月発行。日本初は同年6月発行の田代基徳編『文園雑誌』)。『医事雑誌』は同8年12月までに43号が発行された。信良は福井藩を経て、幕府奥医師となった人物。オランダ医学書を多数翻訳した	当館
66	引札「佐渡養順・金子恕謙」	明治26年(1893)	1	52.3×38.3	佐渡養順製の婦人薬「産前産後・ちよ(ち)のたる」薬と、金子恕謙製の家伝薬「小児諸病丹」、及びこれらの薬を取次販売する「七」(かねしち)の宣伝広告。木版多色刷で暦付。両家ともに江戸時代から医学レベルの高い「高岡医者」の一員として高名であった。また、彼らは漢詩など文芸にも優れていた	当館
67	高峰譲吉 肖像写真	明治後～大正期	1	23.3×18.0	高岡御馬出町出身の世界的科学者・実業家で、日米親善に尽くした高峰譲吉(1854～1922)の肖像写真。スーツ姿で椅子に腰かけている	高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託
68	高峰譲吉愛用 眼鏡	明治後～大正期	2	〔カバー付〕12.5×6.8×1.0 〔カバー無〕11.5×6.2×1.0		高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託
69	高峰譲吉愛用 ルーペ	明治後～大正期	1	7.1×3.6×1.3		高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託
70	高峰譲吉愛用 オペラグラス	明治後～大正期	1	9.5×4.5×3.0		高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託
71	タカジアスターゼ薬瓶	昭和23年(1948)	1	底径3.7×高9.2	高峰譲吉が明治27年(1894)に発明(発売は同32年)した消化酵素剤「タカジアスターゼ」の薬瓶。譲吉の発明から100年以上経った今でも、胃腸薬、消化剤として使用されている。三共(株)(現第一三共株)製造。高峰家も「高岡医者」の主要メンバーであった	当館
72	塩化アドレナリン注射液	大正～昭和期	1	13.7×6.2×高1.5	明治33年(1900)、牛の副腎からホルモンの結晶化に成功し「アドレナリン」と命名した。これは外科手術の止血剤として使われており、医学界からもノーベル賞級の発明だと絶賛された	高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託
73	看板「タカジアスターゼ」	明治後～大正期	1	88.2×14.0×厚2.0	消化酵素剤「タカジアスターゼ」の宣伝用看板。「高峰博士発見・強力消化素」とある。夏目漱石著『吾輩は猫である』の中にも「タカジヤスターゼ」が登場する	当館 (望月保氏)
74	ホーロー看板「タカジアスターゼ」	昭和中期	1	30.3×45.4	ホーロー製の両面看板。表面には「世界的／強力消化酵素／タカジアスターゼ」とあり、裏面には「三共の赤箱／強力オリザニンレッド／無痛性ビタミンB1注射液」(1910年、鈴木梅太郎の発見。12年発売)とある	当館 (津田俊治氏)

75	引札「薬種売薬商 高岡市橋番町・津島 随吉」	昭和2年(1927)	1	74.7×25.9	高岡市橋番町の薬種売薬商・津島随吉の 売薬引札。「たんせき／風引／一服散本 舗」とある。暦付。「高岡医者」の主要 メンバーでもある津島家は、坂下町の内 科医。10代北溪(1813～62)は、医者で漢 詩人。高岡の漢詩壇「娛分吟社」で長崎 浩斎らと活躍。1860年に『高岡詩話』を 著すなど著書も多数ある	当館
76	岡本清右衛門商店 売薬版木	明治～大正期頃	5	〔御薬品々 入〕21.5× 17.6×厚 2.4 〔葛根湯〕 7.4×6.6× 厚2.1 〔万病感応 丸〕14.6× 24.5×厚 2.6 〔感応丸〕 14.2×25.3 ×厚3.2 〔新春挨 拶〕 16.2×28.3 ×厚1.7	高岡横田町にある肥料農薬販売業・(株) 岡本清右衛門商店(1754年創業)の売薬版 木。初代清右衛門は砺波郡大滝村(現高 岡市福岡町)から移り住み、「福岡屋」 の屋号で創業した。千保川にかかる横田 橋近くにあり、綿・布・売薬・肥料など 手広く商品を取り扱った。3代は加賀藩の 綿場買取役、町算用聞などの重職に任じ られた。8代は明治30年代に人造肥料の可 能性に着目し、県下に先駆けて岡本清右 衛門商店を設立した	当館
77	配置薬箱(高岡市東 下関・黒田孝治)	昭和27年(1952) 以降	1	17.0×20.5 ×高10.4	配置薬(置き薬)を収納した薬箱。配置 薬箱が預けられた家庭に半年から1年ごと に訪問する担当販売員へ、使用した薬の 代金を後払いする富山売薬伝統の販売方 法(先用後利)だった。本資料は、前任 の販売業者・平井保之から後任の黒田孝 治へ受け継がれたものと考えられる	当館
78	高岡医者 長崎医院 薬袋・金子為善堂家 伝薬	明治～平成期	3	〔長崎〕 15.3×11.0 〔金子〕各 10.7×8.0	高岡一番町の蘭方外科・長崎医院の内用 薬袋と、坂下町の小児科医・金子為善堂 の家伝薬「癩的」・「小児丸」。1779 年、金子恕謙は木舟町の眼科医・松田三 知と共に、藩主の養嗣子の眼病を治療し た。長崎家の4代蓬州・5代浩斎は漢詩人 としても著名。6代の二男・林忠正(1853 ～1906)は世界的美術商として活躍した	当館 (長崎圭爾氏・ 金子崇氏)
③高岡の産業資料						
No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
79	笹原文次 肖像写真 (パネル)		1	—	文次(1857～1927)は高岡利屋町の染物 業・4代絹屋文助の子として誕生(幼名は 定吉)。25歳頃より染色機械改良の研究 を重ね、1884年には「捺染直接摺込法」 を発明。文次の「新モス友禅」は好評を 博した。文次は自らの発明に改良を加 え、多くの特許権を取得した。また各種 の博覧会でも受賞を重ね、業界の発展・ 後進の指導に尽力した。原版も当館蔵	当館 (笹原荘太郎 氏)
80	高岡捺染 笹原文次 特許証「金形製造 法」	明治41年 (1908)6月26日	1	32.2×23.3	捺染とは、布に色糊をプリントする染色 法。近代高岡捺染(木綿への捺染)の創 始者・笹原文次の画期的な発明の一つ。 型紙を貼った金属板の両面に漆の被膜を 作り、模様部分に薬剤を付け腐食させて 模様を施す方法を説明している	当館 (笹原荘太郎 氏)

81	高岡捺染 草花図捺染亜鉛板型	明治後期	2	〔甲型〕 15.0×18.3 〔乙丙丁型〕 15.2×18.3	草花模様が透かし彫りされた金型。亜鉛板型は、従来の紙製の型紙と比べて伸縮もなく丈夫であった。亜鉛板型へ変えることで量産へと繋がった	当館 (笹原莊太郎氏)
82	「主ナル工場」(複写)	昭和7年(1932)	1	—	昭和7年(1932)当時、高岡市内にあった工場を列記したもの。捺染工場も記される。『旅客案内 高岡駅』(高岡駅、1932年)より	当館
83	高岡市特産品案内リーフレット	昭和9年(1934)頃	1	38.2×35.1	高岡の特産品を写真で紹介したリーフレット。高岡銅器、漆器のほか、高岡捺染、高岡仏壇などが写真付きで紹介されている	当館 (須賀正紀氏・藤本一美氏)
84	高岡市商工奨励館リーフレット	昭和12～13年(1937～38)頃	1	19.8×54.0		
85	大日本物産図絵「越中国鉄物細工之図」	明治10年(1877)	1	17.8×25.3	三代歌川広重(1842～1894)画。博覧会出品直前の伏木港であろうか。高岡銅器の繁栄ぶりを描く。全国各地の名産品とその生産工程等を紹介した錦絵「大日本物産図会」は、明治10年(1877)の第1回内国勸業博覧会にあわせて出版された	当館
86	林忠正著『高岡銅工ニ答フル書』	明治19年(1886)	1	27.3×19.0	高岡銅器の輸出不況を憂い、白崎善平が業界を代表して、パリの林忠正(1853～1906)に対策の教示を請うた。野紙17枚からなる。本書は世界的視野から日本美術工芸の現況を分析し、「西洋人の『用』を考えた機能と形態の重視が必要である」などと助言をしている。原本は林家蔵『高岡銅器維持ノ意見』	当館 (長崎圭爾氏)
87	パリ万国博覧会パンフレット	明治33年(1900)	1	27.7×34.5	林忠正が民間人初の事務官長を務めた第5回パリ万博のもので、忠正が高岡の実家・長崎家に贈ったもの。右に「時節後 (おく) レナレトモ去ル大博覧会ノ有様」とおそらく忠正直筆のメモがある。本万博の開催に際して、忠正はフランスとの交渉や国内の取りまとめに大きな役割を果たし、博覧会を成功させた。のちフランスよりレジオン・ド・ヌール勲章が授与された	当館 (長崎圭爾氏)
88	金森家下図「散朝顔文象嵌花瓶下図」	明治11年(1878)	1	39.0×78.0	明治政府は全国の工芸家に対して博覧会出品及び輸出用の工芸品の質の向上を図るため、「図案配布(貸与)制度」を実施した。本図は高岡の銅器問屋・金森宗七(1821～92)に配布されたもの。明治政府による本制度を活用した当館所蔵の下図のうちで最古のもの。割印「(内務省)勸商局製品画図掛印」。「象嵌色分ヶ」として「焼金(純金)」など8種の色違いの金属を象嵌するよう指示がある。また「十二月分」ともあり、宗七が図案配布制度を大いに活用していたこともわかる(関沢卯一と並び、高岡では最多の12件)	当館 (金森健造氏)

89	金森家下図「花鳥文扁壺形象嵌花瓶下図」	明治12年(1879)	1	27.8×39.0	国の図案配布制度により、高岡の銅器問屋・金森宗七(1821～92)に配布された下図。割印「(大蔵省) 商務局製品画図掛印」。画工・鶴沢守保(1834～93)。左の側面図には「胴茶真鍮」とある。配布の際の台帳『製図送付記』(東京国立博物館)によると、一対であること、李花(スモモの花)にジョウビタキ(冬の小鳥)の図案であることがわかる。本図は『温知図録』第四輯に掲載されている	当館 (金森健造氏)
90	金森家下図「柘榴に鳩文象嵌香炉下図」	明治12年(1879)	1	75.8×53.7	国の図案配布制度により、金森宗七(1821～92)に配布された下図。割印「(大蔵省) 商務局製品画図掛印」。本図は『温知図録』第四輯に掲載されている。画工の岸光景(1839～1922)は東京出身の図案家。博覧会審査官を務め、1877年には銅漆器製造会社「精工社」を共同設立し、第2・3回内国勸業博覧会に出品受賞多数。石川県で工芸図案研究会「蓮池会」を組織し、1906年には図案を専門とした唯一の帝室技芸員となった	当館 (金森健造氏)
91	金森家下図「葛に女郎花文象嵌花瓶下図」	明治12年(1879)	1	46.9×61.0	国の図案配布制度により、金森宗七(1821～92)に配布された下図。割印「(大蔵省) 商務局製品画図掛印」。本図は『温知図録』第四輯に掲載されている。画工の武居基一郎の詳細は不明だが、洋画家・高橋由一の画塾「天絵社(舎)」(東京日本橋)に学び、明治11年(1878)、群馬県師範学校の図画教員をしていたようである(金子一夫「明治期中等学校図画教員の研究-3-関東地方」1989年)	当館 (金森健造氏)
92	大橋家下図「豆に蝸牛文蠟型象嵌花斛下図(中表)」	明治12年(1879)10月30日下付	1	27.4×38.4	高岡銅器の名工・問屋の白崎善平(1837～92)に配布された下図。割印「(大蔵省) 商務局製品画図掛印」。中央上部の割印より、当時富山県が石川県の時代(明治9～16年)で、県を経由して図案が配布されたことを示す。岸光景(1839～93)画。また「蠟形象眼入」とあり、文様は蠟型鑄造での制作が指示される。また「花斛(花盛)ノ花瓶ノ三ツ揃」とあり、一対の花瓶と三つ組であることもわかる。『温知図録』第四輯に掲載。第2回内国勸業博覧会(1881年)妙技賞牌3等受賞作品	当館 (大橋秋肥氏)
93	大橋家下図「草花文象嵌花瓶下図(正面)」	明治13年(1880)1月17日下付	1	55.3×33.7	国の図案配布制度により、高岡銅器問屋・大橋三右衛門(1851～95)に配布された下図。割印「(大蔵省) 商務局製品画図掛印」。朱書きで象嵌する金属(「四分一」・「金」・「銀」・「素銅」など)が記される。7枚セットのうち	当館 (大橋秋肥氏)
94	大橋家下図「獅子鈕幾何学文高足香炉」	明治13年(1880)1月下付	1	58.5×42.8	国の図案配布制度により、高岡銅器問屋・大橋三右衛門(1851～95)に配布された下図。「(大蔵省) 商務局製品画図掛印」。前田貫業(1840～?)画。本図は主に明治14年の第2回内国勸業博覧会出品、または海外輸出を目的とした図案が収録された『温知図録』第四輯に掲載されている	当館 (大橋秋肥氏)

95	大橋家下図「牡丹文 象嵌壺下図（左 表）」	明治13年 (1880)4月15日 下付	1	60.0×34.5	高岡銅器の名工・横山弥左衛門孝純(1837～92)に配布された下図。割印「（大蔵省） 商務局製品画図掛印」。高岡銅器問屋・大橋三右衛門(1851～95)家に伝来。川崎千虎(1837～1902)画。地色を「宣徳色」（中国・明の宣徳時代の銅器に多く見られる色調）に、鈕や耳の鳥は黒色に着色すべきとの指示がある。画工の川崎は、尾張（愛知県西部）出身の日本画家。歴史画家として名をはせ、東京美術学校教授等を歴任、日本美術院創立に参加した	当館 (大橋秋肥氏)
96	定塚家下図「兎に八 咫鳥文薄端下図」	明治後期～大正期	1	27.2×39.2	高岡博労町の銅器問屋・定塚家下図。「富山県工業会高岡部会」印。当部会は、明治32年(1899)に銅器業界が図案の改良と普及、供給を目的として高岡商工会議所内に設置した。米沢三吉を専属デザイナーとして迎え、業者の求めに応じて低額の料金で図案を調整した	当館 (定塚実氏)
97	定塚家下図「朝顔文 耳付花瓶下図」	明治後～大正期	1	39.6×27.4	県からの指導を受けて作成された高岡博労町の銅器問屋・定塚家下図。本図に「藤田善六君」とある	当館 (定塚実氏)
98	定塚家下図「達磨文 硯」	明治後～大正期	1	39.6×36.8	県からの指導を受けて作成された、高岡博労町の銅器問屋・定塚家下図。「第百十四号」。「定塚喜三太郎氏」。「富山県工業会高岡部会」印	当館 (定塚実氏)
99	定塚家下図「近江八 景文火鉢」	明治後～大正期	1	27.3×38.2	県からの指導を受けて作成された高岡博労町の銅器問屋・定塚家下図。現滋賀県の名所・近江八景のうち「矢橋帰帆」・「粟津晴嵐」・「堅田落雁」・「比良暮雪」の4つを描く。「第一二七号」。「定塚喜三太郎氏」。「富山県工業会高岡部会」印	当館 (定塚実氏)
100	角羽家下図「花瓶下 図（器形五種）」	明治18年(1885)	1	27.4×39.1	高岡の銅器問屋・角羽家下図。国の図案配布制度により下付されたことを示す割印「（農商務省） 博物館製図記」が捺され、「角羽勘左衛門」とある。『温知図録原稿』（1885年）に掲載。角羽家は、1790年6代勘左衛門が銅器商「羽広屋」を創業、全国に販路を広げた。9代目は高岡小馬出町出身。1860年横浜居留地貿易に進出した	当館
101	角羽家下図「天岩戸 図」		1	19.4×27.5	高岡の銅器問屋・角羽家下図。天照大御神が弟・須佐之男命の悪事を戒めるために岩戸に隠れたという神話を描いたものの。「羽広屋／角羽勘左衛門」と印が捺されている	当館
102	瑞龍寺改鑄梵鐘鑄型 （土型）	明和5年(1768) 頃	8	—	鑄型（溶けた金属を流し込む型）の内側に模様をつけるための型。乳、撞座（撞木を当てて音を出す部分）など。梵鐘は、最初は万治元年(1659)に造られたが、延享3年(1746)の火災により焼失し、明和5年に高岡鑄物師が鑄造した。南部家資料	当館 (南部賢三氏)

103	旧南部鑄造所 鑄物資料（木型5点、陶製型43点、型製作道具17点）		65	—	高岡市横田町で鑄物業を営んでいた、南部鑄造所（1893年創業～2000年頃廃業）の鑄物関係資料。土型の瑞龍寺改鑄梵鐘をはじめ、木型、陶製型などの各種鑄型のほか、型作成用具（へう・金具類）等、計383点が寄贈された。「旧南部鑄造所のキューボラ（溶鋳炉）及び煙突（煙道が付く）」は、国の登録有形文化財となっており、大正13年(1924)から平成12年(2000)まで稼働していた	当館 (南部賢三氏)
104	須賀月真工房 蠟型鑄造製作用具（石膏型15点、陶製型12点、金型各種101点、蠟型鑄造製作途中資料2点、鑄造製作道具41点）		171	—	高岡市古定塚にあった須賀月真工房の蠟型鑄造製作用具。蠟型鑄造は国の「伝統的工芸品」に指定（「高岡銅器」4技法の内）。平成29年、四代月真氏の廃業に伴い、金型や石膏型、鑄物土の中子・外型等、計542点が寄贈された。月真叟松園（初代須賀松園、本名亥子蔵）は、明治41年に東京から高岡へ移住し、蠟型鑄造の技を高岡に伝えた。以後、子息の須賀真之助が月真の号を、須賀精一が松園の号を継ぎ、代々高岡の蠟型鑄造の中心的存在として活躍	当館 (四代須賀月真氏)

3 美術資料

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
105	太刀 銘 宇多国宗	文明期(1469～87)頃	1	長さ65.8 反り3.0	鎌倉末期に現奈良県から高岡市福岡町に移住した刀工集団「宇多派」の国宗による古刀期の太刀。3代国宗の作か。永徳期(1381～84)に活躍したと伝わる初代は宇多派の祖・国光の子で、国房の弟とされる。2代は現滑川市に移住したという。名跡は新刀期まで襲名された	当館 (山田館夫氏)
106	脇差 銘 賀州住兼若	江戸初～中期頃	1	長さ48.8 反り1.7	加賀前田家のお抱え刀工・辻村兼若作による脇差（代数不明）。初代兼若は美濃（現岐阜県）の志津三郎兼氏の末裔。美濃から尾張（現三重県名古屋）市犬山に移住し、後に前田家に召され金沢に移った。刀の切れ味にも優れ、「加賀正宗」として名声を博した名匠である。金沢では、「兼若を持つ者には禄が低くても嫁にやる」という話もあったという	当館 (寺畑喜朔氏)
107	安川乾清作《鍛鉄地竹虎文金銀象嵌鐔》	宝暦～明和(1751～72)期	1	6.9×6.7× 厚0.3	高岡彫金の祖・安川乾清の在銘作品。鍛鉄の地金に岩上の虎を金・赤銅（金と銅の合金）・四分一（銀と銅の合金）で高肉象嵌し、竹は赤銅で平象嵌されている。乾清は白銀町に住み、子孫は代々「乾清」を襲名した。高岡御車山にも在銘作品がみられる。高岡市指定文化財	当館

108	白銀町母衣武者飾り	江戸後期	3	—	白糸威二枚胴具足、鉄錆地六十二間小星兜（銘「明珍久次」、前立龍木彫銘「天保十年(1839)／武田秀平謹造」）、母衣（竹籠等で膨らませた布）、町旗。高岡御車山祭は、国指定重要有形・無形民俗文化財。同祭では、かつて母衣武者行列が曳山や神輿を先導した。現在祭を行う山町とは別の4町内で母衣武者・大小の纏などが飾られる。やや小型のこの甲冑には、14ヶ所に藩主しか使えない幼剣梅鉢紋がみられ、14代前田慶寧(1830～74)所用の童具足の可能性がある	白銀町自治会・ 当館寄託
109	写真「白銀町母衣宿の景」（複写）	昭和24年(1949)	1	—	当時の白銀町母衣宿の様子がわかる写真	当館
110	「越中国高岡／関野神社祭礼繁昌略図附録」	明治16年 (1883)4月14日	1	17.3× 196.5	高岡御車山祭の様子を描いたもので、その実態を示す最古の絵画史料とみられる。鴨島町の大旗を先頭に、現在の二上射水神社（二上山麓）の源太夫獅子が続き、博労町・鴨島町・白銀町・利屋町・横町(元町)・梶原(湊)町・宮脇町・平米町の母衣武者が神輿と7基の御車山（曳山）を先導している。現在はこの前半部分の行列が行われなくなっている	当館
111	関義平作《花鳥文金銀象嵌花瓶》	明治前期	1	口径12.4× 高32.1	高岡鴨島町出身の彫金師・関義平(1857～1923)作。素地は青銅鑄造に銀・赤銅・四分一・真鍮肉象嵌がなされ、文様は銀・赤銅平象嵌・金布目象嵌・金着せ・蠟流しなどの多様な技法が使われている。底面の陰刻銘「大日本／越中国高岡」から、明治前期の輸出向け作品と思われる	当館
112	米田鳩秀図案・鷺塚暁眠作《青銅一文字型水盤》	昭和5年(1930)	1	径51.2×高 15.8	図案家の米田鳩秀(1890～1961)の下図をもとに、弟で鑄造家の鷺塚暁眠(1891～1960)が製作した。第17回商工展2等賞受賞作品。鳩秀・暁眠ら米田一族の多くは銅器業界に関わり、農展・商工展での入選数は県下で最も多い。2人は共に県工業試験所の技師などを務め、先端的な作品を手がけた	当館 (宮木良一氏)
113	米田家下図「青銅一文字型水盤 型紙」	昭和5年(1930) 頃	1	25.6×25.6	米田鳩秀画。「昭和五年／二ト賞／鷺塚」とある。鉛筆画	当館 (米田富美雄氏)
114	二代須賀松園作《蠟型鑄造額面「魁星」》	昭和39年(1964) 頃	1	20.4×16.4	蠟型鑄造作家・二代須賀松園(1898～1979)／国選択の記録作成等の措置を講ずべき無形文化財保持者が「龍」と並び得意とした「魁（魁星とも）」。魁は「文章星」という中国の文事を司る神様で、右手には筆、左手には墨壺を持つ。隆々と盛り上がる筋肉や天衣から、躍動感あふれる作品となっている	当館

115	伝 塗師屋八兵衛作 《朱草花文菓子取》	元禄7年(1694)	10	各径19.0× 高1.5	元禄年間に高岡にいた塗師屋八兵衛作と伝わる銘々盆。10枚組。「朱小まる盆」の名で伝世。色漆蒔絵は城端風だが、銀朱蒔きぼかしや銀消など城端蒔絵にはみられない技法も使われている。描かれた模様は写生風で簡潔、また花びらには甘汞（塩化第一水銀）を使用しているなどの特徴がある	当館
116	伝 辻丹甫作《花唐 草雲龍模様存星塗箆 笥》	江戸中期	1	幅34.5×奥 行19.3×高 23.7	辻丹甫(1722～1805)は、現高岡市辻の出身で高岡工芸漆器の開祖とされる。砺波屋伊右衛門、丹楓、砺波今道、荒虫とも。明和年間(1764～71)頃、京都で修業して、帰郷後に擬堆黒(朱)・存星などの中国風の漆彫りの技術をもたらし、それらは「丹甫塗」と総称された。また国学、和歌等にも長じた文化人でもある	当館
117	伝 納富介次郎図 案・村上九郎作彫刻 《高岡彫刻塗「二匹 鯛」》	明治末～大正期 頃	1	最大径70.5 ×高2.5	高岡漆器の代表作品の一つ。2匹の鯛が向かい合って抱き合う姿。デザインは富山県工芸学校(1894年開校／現県立高岡工芸高校)初代校長・納富介次郎、彫刻は同校教頭の村上九郎作(高岡彫刻塗の祖)と伝わる。後に、挽物木地に1匹の鯛を円形に配したものとなり、数多く生産されることとなった	当館
118	高瀬想風作《錆絵 漆の筥》	昭和37年(1962) 頃	1	幅33.0×奥 行15.0×高 10.2	高岡市大手町出身の漆芸家で、高岡漆器の代表的技法「錆絵」の県指定無形文化財保持者・高瀬想風(1898～1977)の作品。蓋表は高岡漆器特有の「うるみ色」が塗られ、螺鈿・蒔絵・錆絵などの複数の漆芸技法が施される。錆絵とは、漆で固く練った砥の粉を用い、文様をレリーフ状に盛り上げて造る技法のことで、ここでは極細の線を長々と引く超絶技巧を見せている	当館
119	篠田茂三郎作《景岸 焼 大黒文中皿》	明治3～28年 (1870～95)頃	1	径18.4×高 2.2, 高台 径9.5	現高岡市福岡町で焼かれていた景岸焼による中皿。創始者・篠田茂三郎(1837～95)は、輸出磁器の製造を思い立って色絵付の磁器窯を興した。明治11年(1878)にはパリ万国博覧会で銅賞を受賞するなど活躍したが、後継者がおらず、茂三郎の死と共に廃窯となった	当館
120	内藤心月作《古府焼 羅漢香炉》	明治43年(1910) ～大正3年 (1914)頃	1	9.2×8.5× 高11.9	古府焼は、内藤心月(現愛知県常滑市出身。1858～1921)が明治43年(1910)に伏木古府の御亭角にあった北村作右衛門の瓦窯で焼いたことが始まりとされる。羅漢とは仏道修行者のことで、香炉を持つ様子から、半託迦尊者を表していると思われる	当館
121	角陶風作《黒田焼 牡丹に鯉文色絵馬上 盃》	明治中～大正期	1	口径5.4× 底径5.5× 高17.0	現高岡市下黒田で焼かれた、角陶風(1885～1926)による黒田焼の馬上盃。「射水焼」ともいわれる。黒田焼は角陶風が大正5年(1916)創始した。最盛期には大規模に製陶していたが、長男・保の代で経営困難となり、昭和3年(1928)廃窯した	当館

122	堀川敬周筆《高岡町奉行肖像》	天保11年(1840)	1	41.2×68.2	高岡初の町絵師・堀川敬周(1789頃～1858)による江戸後期の町奉行・由比義勝(右)と脇田直与の肖像画。明和9年(1772)、鰯などの塩干魚を取り扱う四十物屋を悩ませていた高額な税金が時の町奉行の裁きによって、一部緩和された。四十物屋が多く住む川原町ではこれを永く記念するため毎年「鰯祭り」を行い恩に報いていた。しかし、天保8年(1837)に再び魚の取り扱いについて紛争が起こった。この時、由比・脇田の両奉行は四十物屋のために尽力してくれたので、これを徳として、本図を作り、鰯祭りに併せて祀ったといわれる。絹本着色	当館
123	堀川敬周筆・西村十丈園賛《松尾芭蕉像》	江戸後期	1	124.0×29.2	高岡初の町絵師で俳諧にも造詣の深い堀川敬周(1789頃～1858)が俳聖・芭蕉を描き、現三重県出身の画家で俳人の西村十丈園(?～1830)が芭蕉の句を書いた合作。「朝夜さを誰松島ぞ片心」とある。芭蕉の日本三景の松島への憧(あこが)れを女性への思いになぞらえ詠んだ句とされていたが、近年この「誰」は平安後～鎌倉初期の僧・見仏上人と解釈されている	当館
124	佐々木泉山画・土山澤映賛《菊花図》	江戸後期～明治前期	1	120.0×28.0	狩野派絵師・佐々木泉山(1834～86)と、勝興寺23代(18代とも)住職・土山澤映(1843～1906)との合作。澤映の賛には「いく千代を ふるともふりし 長月も けふも縄せぬ 菊のことの葉」とある。加賀藩御用絵師一族の泉山と、和歌や書に秀でた澤映との交流を示す貴重な資料	当館
125	正村陶所筆《古城観花》	大正～昭和初期	1	128.0×28.8	高岡出身の日本画家・正村陶所(1886～1954)が描いた春の古城公園。本紙右上部には陶所の自賛があり、見渡す限りに桜などの花々が咲き誇る情景の素晴らしさを書いている。陶所は、獨創性豊かな淡墨彩画を描く傍ら、高岡の漢詩人・大橋二水などに漢詩を学び、筏井竹の門等俳人との交遊も広い	当館
126	大浦彦一筆《高岡産業博覧会会場鳥瞰図》	昭和26年(1951)	1	99.2×142.2	石川県白山市出身の画家・大浦彦一(1902～1973)筆。昭和26年4月5日から5月25日まで高岡古城公園で行われた高岡産業博覧会の会場鳥瞰図。高岡ホテル旧蔵。美術館(現当館本館)や北陸地方初の公開となった「テレビジョン館」、本丸には小牧ダムの巨大模型やテーマ塔など計23の建物が描かれる。50日間の会期中に62万人以上の来場者が訪れた	当館
127	閑雲筆《五絶》	江戸後期	1	39.8×52.8	能登の総持寺及び高岡瑞龍寺18世住職・閑雲(真巖国常)(1778～1859)の漢詩書。「通玄峰頂／不是人間／心外無法／満目青山」(心境一如なる故に、心外には法無く、目に見ゆる青山も我心に外ならずと、一心と外境の不二なるをいふ)とある(『景德伝灯録』の一節)。閑雲は晩年、専ら詩文と書道を楽しんだが、特に書が巧みで世に珍重されている	当館

128	佐竹龍水筆《五絶》	明治期	1	133.6×38.7	高岡市太田の国泰寺第57世管長・佐竹龍水(1857～1934)の漢詩書。「富貴非吾願 開生元是真／詩書養貧病 真樂在期中」とある。龍水は現三重県出身。明治42年(1909)国泰寺官長に就任。禅会を通しての布教活動だけではなく、漢方にも通じ、施薬・点灸をもって大衆の教導にあたった	当館
129	筏井竹の門 肖像写真 (パネル)		1	—	高岡ゆかりの俳人・俳画家の筏井竹の門(1871～1925)は、旧金沢藩士の家系で金沢市出身。旧名は向田虎次郎。明治25年(1892)高岡に転居し、繊維商に勤務する。同30年には日本派俳句会「越友会」の指導者として、越中俳壇に貢献する傍ら、俳画にも打ち込み、多数の作品を遺した。句集・歌集・遺墨集4種がある	個人
130	筏井竹の門筆《書簡「自画像」》	大正12, 13年(1923, 24)頃	1	36.0×33.8	筏井竹の門が、俳句の弟子で陶芸家の内島北朗(1893～1978)に宛てた手紙。北朗夫人の快気のお祝いとともに自分の病状を伝える	当館
131	筏井竹の門 俳句短冊	大正期	3	〔左〕36.2×6.1 〔中〕36.2×6.0 〔右〕36.4×6.1	高岡ゆかりの俳人・俳画家の筏井竹の門の俳句短冊である。左「山吹の黄なる落葉／や／三十三才」、中「元旦実のならぬ南天の／ほのかなる雪」、右「天狗松を真向うに／上る茸乏し」	当館
132	大橋二水筆《漢詩書「古城公園の詩」(七絶)》	昭和11年(1936)	1	138.0×33.3	高岡市木町出身の政治家で漢詩人・書家の大橋二水(1859～1940)の前田利長を顕彰する漢詩書。古城公園本丸西隅にこの石碑がある(郷土史家・飛見丈繁建立)。「山河此处旧金湯 太守英風鎮四疆 長有遺黎懷惠沢 一園花木是甘棠」とある。二水(十右衛門、弘とも)は明治14年(1881)に高岡片原横町に越中義塾を創設、同41年まで政界で活躍し、晩年は漢詩を究めるなど文化人としても高名だった。『二水遺稿』などを著す	当館
133	稲葉心田筆《鳳凰鳴矣于彼高岡》	昭和後期	1	72.4×166.8	現愛知県一宮市出身で、高岡市西田の国泰寺第62世管長・稲葉心田(1906～86)筆。高岡の開祖・前田利長は、「関野」を『詩経』(中国最古の詩集)の一節「鳳凰鳴矣于彼高岡」により、「高岡」と改名したといわれる。書画に優れた心田は、各地で座禅会などを開き、国泰寺整備や社会福祉に尽くした	当館

◆ポスターにみる高岡市立博物館の50年

No.	資料名称	会期	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
134	博物館開館記念 特別展「ブランデー・コレクション」	昭和45年(1970)7月12日～8月2日	1	51.5×72.8	国際オリンピック運動の指導者として高名なブランデー氏のコレクションで、アメリカ・サンフランシスコ市のディ・ヤング美術館所蔵の中国古美術作品を展示・紹介した	当館

135	高岡市市制100年記念 特別展「高岡重要文化財展」	平成元年 (1989)4月26日 ～5月21日	1	51.5×72.8	高岡市市制100年を記念し、高岡市内に所在する重要文化財指定を受けた資料を展示・紹介した	当館
136	富山県・遼寧省友好県省締結五周年記念「中国遼寧省文物展」	平成元年 (1989)7月1日～ 7月30日	1	51.5×72.8	富山県と中国・遼寧省との友好県省締結5周年を記念し、中国遼寧省の古美術、文物等を展示・紹介した	当館
137	博物館開館20周年記念 特別展「前田利長展」	平成2年(1990)9月1日～9月30日	1	51.5×72.8	高岡開町の祖・前田利長に関わる古文書、文献、遺品等を展示・紹介した	当館
138	一蓮如上人五百回忌記念- 特別展「蓮如上人展」	平成9年(1997)6月28日～7月21日	1	51.5×72.8	本願寺第八世として浄土真宗の教化・普及に大きな役割を果たした蓮如上人の五百回忌にあたり、その遺徳をしのび、上人にまつわる貴重な文化財、文献、未公開資料を展示・紹介した	当館
139	特別展「帰ってきた幽霊」	平成12年 (2000)6月23日 ～8月6日	1	51.5×72.8	富山県内及び近県の寺院に伝わる「幽霊図」を中心に、安城市歴史博物館等が所蔵する幽霊芝居の錦絵や版本などを展示・紹介した	当館
140	企画展「高岡銅器・下図の世界」	平成17年 (2005)4月29日 ～6月26日	1	51.5×72.8	高岡銅器の作品は、下図（図案）を基にして作られ、細部の技法・材質・色など細かな支持が記された「設計図」である。本展では、高岡銅器産業を支えた銅器問屋である金森家・角羽家・大橋家・定塚家・岡村家などが所蔵していた下図類を展示・紹介した	当館
141	常設展「高岡ものがたりー楽しく知ろう！ひらめき・ミュージアムー」	平成19年 (2007)7月21日 ～	1	51.5×72.8	高岡市が平成21年(2009)に開町400年を迎えることを控え、常設展の展示改修を行い、平成19年(2009)7月21日にリニューアルオープンした。高岡の歴史・民俗・伝統産業等について分かりやすく展示・紹介している	当館
142	博物館開館40周年記念 特別展「心のふるさと 二上山」	平成22年 (2010)7月31日 ～10月17日	1	51.5×72.8	高岡市の二上山は、国守として越中に赴任した大伴家持による万葉集や山麓に点在する数々の寺社や史跡とともに、市民に親しまれてきた山である。本展では、二上山と周辺地域に関する種々の資料を展示・紹介した	当館
143	特別展「国史跡指定記念 高岡城跡の魅力」	平成27年 (2015)7月25日 ～10月12日	1	51.5×72.8	平成27年3月10日の高岡城跡国史跡指定を記念し、高岡城跡詳細調査（平成20～24年度）の成果をはじめ、高岡城跡及び高岡古城公園の絵図・地図などの関係資料を展示・紹介した	当館

※資料保存のため、一部展示替えをすることがあります。

計143件441点